

大使館の始末機関

——金博士シリーズ・7——

海野十三

青空文庫

ずいぶんいい気持で、兵器発明王の金博士は、豆戦車まめせんしゃの中に睡すいった。

睡眠剤すいみんざいの覚め際は、縁側えんがわから足をすくと踏み外はずすが如く、極めてすとのなるものであつて、金博士は軒いびきを途中でぴたりと停めたかと思うと、もう次の瞬間には、

「さて、この大使館では朝飯あさめしにどんな御馳走を出しよるかな」

と、寝言ねごとではない独り言ひとりごとをいった。

博士が、年齢の割にかくしゃくたる原因は、一つは博士の旺盛おうせいなる食欲にあるといつていい。

目の前に押釦おしボタンが並んでいた。

押釦おしボタンというものは便利なもので、それを指で押すだけで、大概たいがいの用は足りてしまう。以前、博士のところへ、新兵器の技術を盗みに来た某国ぼうこくのスパイは、博士のところにあつた押釦ばかり百種も集めて、どろんを極めたそうである。

閑話休題、博士が、その押釦の一つを押すと、豆戦車の蓋がぽっかり明いた。博士はその穴から首を出して左右を見廻した。

「やあやあ、この豆戦車を明けようと思つて、ずいぶん騒いだらしいぞ」

この豆戦車は、某国大使館の一室に、えんこしているものであった。部屋の寝台は、片隅に押しつけられ、床には棒をさし込んで、ぐいぐい引張つたらしい痕もあり、スパンナーやネジ廻しや、アセチレン瓦斯の焼切道具などが散らばっていた。

「この大使館にも、余計な御せつかいをやる奴が居ると見える。これだから、旅に出ると、一刻も気が許せないて」

そういいながらも、博士は別に愕いた様子でもなく、豆戦車からのつそりと外に出た。それからまた、もう一度豆戦車の中をのぞきこむようにして、押釦の一つをぷつんと押した。すると、がちやがちやと金属の擦れ合う賑かな音がしたかと思うと、その豆戦車はばらばらになり、やがてそのこまごました部分品や鋼鉄がひとりでに集つてきて、三つのトランクと變つてしまった。重宝な機械もあつたものである。

博士は、そのトランクを、部屋の隅に重ねて積み上げた。

それから、もみ手をしながら、扉を開けて、階下へ下りていった。

博士はずんずん食堂へ入っていった。

「おい、飯を喰わしてくれんか」

食堂の衝立ついたての蔭かげから、瞳からだの青い、体の大きい給仕きゆうじがとびだしてきたが、博士を見ると、直立不動の姿勢をとって、

「あ、王水險おうすいけん先生のお客さままでいらつしやいましたね。では、只今したく仕度しどをいたしますから、しばらくお待ちを……」

といつて、周章あわてて衝立ついたてのかけに引込ひっこんだ。

金博士は、ぶうと鼻を鳴らして、窓ぎわに出た。広い庭園は、今は黄いろくなつた芝生しばふで蔽おほわれ、ところどころに亭あずまやみたいなものがあるかと思うと、それに並んでタンクのようなものがあつたり、なにか曰いわくのありそうな庭園であつた。

「どうも半端はんぱな庭園じゃな。それにしても、王老師は、どうしていられるのか。おいおいボーイ君、王老師はまだこの大使館へ出勤せられないのか」

金博士が、がなりつけるようにいうと、ひよつくり衝立からとびだしてきた給仕きゆうじ頭がしらが、

「は。王老師は、当館にお泊り中ですが、まだお目ざめになりませんので……」

「まだ目がおさめにならぬ。はて、年寄のくせにずいぶん寝坊でいらつしやるな」

「はい。今までこんなことはなかつたのでございますが、ふしぎなことで……。只今、医師が参りました、診察をして居ります」

「診察？ 老師は、睡りながら病気に罹かかられたのかね。ずいぶん御器用ごきようじゃ」

「いや、そうじゃございません。あまり睡りすぎるといので、一同心配のあまり、医師をよびましてございます。それに 鬻しょうかいせき買石先生も、同様一昨日の夜以来、睡り込んでられますので……」

「なんじゃ、鬻買石？」

博士の眼がぎよろぎよろと動いた。

「ははあ、読めたぞ。おい、王先生のところへ案内頼むぞ」

「は。ではこつちへどうぞ」

金博士は、給仕頭の案内で、王老師の部屋を訪れた。

博士はその部屋に入ったが、すぐ出て来た。そして元の食堂に戻って来た。

このとき卓テーブル子テーブルの上には、白いクロスが伸べられ、その上には金色のフォークやナイフが並び、卓子の用意が出来ていた。

博士は、ナプキンを胸にさし込みながら、食事の催促さいそくをした。

給仕が、燻製くんせいの鮭さけを、金の盆きんにのせて持つてきた。

「おや、わしの好きな燻製くんせいが朝から出て来るぞ。これは頼たのもしい。彼奴きやつらの目の覚めないうちに、腹一杯喰くつておくことにしよう」

博士の機嫌きげんは、斜ななめならず、フォークとナイフとを使いながら、何かしきりに眩つぶやいている様子が、たいへん楽しそうに見えた。

そこへ給仕頭きしづかが、次の料理を搬はんできた。金博士は、その給仕頭をとらまえて、

「おい、あんちゃん。わしが王先生わうせんと醬買石じょうかいの寢室のぞを覗のぞきにいったことは、内緒うちにしておいてくれ。これはわしの志こころざしぢや」

そういつて博士は、ポケットから取り出した一つかみの金貨あきを呆あきれ顔かほの、給仕頭きしづかの掌てにのせてやった。

人を咒うことについて趣味のある 醬しょう買石かいせきと、彼にうまく担かつがれているとは知らぬ王お老師ろうしとは、醫師の手当てあての甲斐かいあつて間もなく前後して、目を覚ました。

「人払いだ」

醬は、目が覚めるや、大声を発した。

居い候そうろうなりとはいえ、今を時めくA B C D S株式国家のC支店長の号令である。それに愕おどろいて醫師は診察鞆たもとをそこに忘れて立ち上ると、部屋附のボーイは、出かかった嚏くさめを途中で停めて部屋を出た。

「ああ、王老師。どこへ行かれる」

「人払いじゃ」

「ああ、王老師はここに居いたて頂ただかねばなりません。そうでないと、話が出来ません」
「するとわしは人の部類しりに入らない訳すいじやな。やれやれ情けない」

老師は、無理やりにお臀しりに刺された 睡眠解下剂すいみんかいげざいの注射のあとがまだ痛むので、すこし不機嫌であつた。

「なに用じゃ、醬どの」

老師は、腰がだるくて仕方がないが、立ったままでものをいう。

「何よりもまず、余が依存いぞんいたすことは、老師の手腕と、この某国大使館における始末機関の偉力いりよくとですぞ。昨夜は失敗しましたが、今日は十分に駆使くしして、金博士を綺麗に始末していただきたい。大丈夫でしょうな」

「商売熱心なるその言葉、恐れ入ったぞ。今日こそは、始末機関をフルに働かして、邪じやて弟金の奴を片づけてしまふであらう」

「いや、その御言葉で、余は安堵あんどしました。さあ、後は十分おくつろぎ下さい。ボーイを呼びましょう」

醬は、ベッドの上に半身をねじつて、枕まくらもと許もとの押おし鈕ボタンを押した。すると枕許のスタンドが、ふつと消えた。

「おや、これはボーイを呼ぶ押鈕じゃなかったか」

醬は、しまったという表情で、今度は壁からぶら下っている鈕を押した。すると、とたんにがらがらというしたたかな雑音が聞え、続いてアナウンサーおうじょう鶯嬢の声で、

「……今日十六日の天気予報を申し上げます。今日は一日中晴天が続きますようから、空襲警報に御注意下さい。明日はまた天気は下り模様くだもようとなり——」

醬は、ふうツと猫のような叫び声を出して、部屋の隅のラジオ受信機のところまで歩いてスイツチを切った。

王老師は、あきれたような顔で、

「ああ、アナウンサー驚嬢も、どうかしているな。今日は十五日であるのを、十六日といいまちがえた。近頃の若い者は、熱心が足りない」

「老師、今日は十六日ですよ。余の腹心の部下からの報告があつたから、まちがいなしですわ」

「そんなことはない。醬どのは、算術を忘れてしまわれたか。十四日の次は十五日であるが、決して十六日ではない」

「いや、老師、私たちは、一日余計よけいに睡すいつたのですよ。部下の報告から推おして考えると、金博士を睡すいらせる睡眠すいみん瓦斯ガスが、余と老師とも作用した結果です」

「そんなことはない」

「いや、そうです。われわれ二人は、金博士が睡すいつたかどうかをみるために、うつかり金博士の部屋に入ったではありませんか、あのときあの部屋に残っていた睡眠すいみん瓦斯ガスを、われわれが吸いこんだのです。そして足かけ二日間に亘りばかばかしく睡りこんだ……」

「ああ、そうか。いや、それにしても四十幾時間も睡るわけがない。わしの調ちようこう合ごうによれば、せいぜい前後十時間ぐらひは睡るように薬の濃度のうどを決めたつもりじゃったが……」

「しかし結果は、このとおり四十二時間も効きいたのです。ねえ、王老師、失礼ながら老師は、学問的にすこしく疲れていられるのではありませんか。もしそうだとすると、これからあの金博士の奴を、この某大使館の始末機関で始末していただくこうと余は大いに期待しているわけですが、それが甚はなはだ覺おぼ束つかないことになりますなあ。老師、大丈夫ですかなあ」

醬買石は、心細そうにいう。

「濃度をまちがえるような耄もうろうく碌ろくはしないつもりじゃが、はて、どこでまちがったかな」

王老師は、しきりに首をひねったり、山羊髯やぎひげをしごいてみたが、一向その不思議は解とけなかつた。

「おかげさまで、十分睡眠をとることが出来まして、長旅の疲れもすっかり癒なほりましたわい。いや、老師のおかげです」

食卓に向い合つて、金博士が、王水おうすい險けん老師ろうしを恭うやうや々はいしく拝はいしながらいった。それは老師にとつて、いささか皮肉にも響く言葉であつた。

「いや、お互たがいの年とし齡ととなつては、疲れを除くには睡眠にかぎるようじゃ。すなわち、いよいよ年とし齡とをとれば、大量の睡眠が必要となり、すなわち永遠の眠りにつくというわけじゃ」

「御教訓、ありがたいことでございます」

老師は照れかくしに、つまらん講義を始める。

「ところで、この酒を一杯けん献けんじよう。これはこの地方で申す火酒ウオツカの一種であつて、特別醸じようぞう造ぞうになるもの、すこぶる美味びみじや。飲のみむときは、銀製の深い盃さかずきで吞のみめといわれている。ではなみなみとついで、乾盃けんぱいといこう」

二つの銀の盃ウオツカに、その火酒ウオツカはなみなみとつがれた。盃ふちの縁ふちは、りーんといひ音をたてて鳴つた。

「チエリオ！」

「はあ、ペスト！」

金博士は、変な言葉でうけて、盃の酒を、一息に口の中に流しこんだ。

老師も盃を傾けて口の傍そばに持つていった。しかし師は酒を呑んだわけではない。老師の拇おやゆび指ゆびが、その盃についている突起とつきをちよいと押した。すると、盃の底に穴があいて、酒はこの穴を通して盃の台の中にちよろちよろと流れ込んでしまった。とんだ仕掛のあるインチキ盃だった。

「どうじゃ、美酒びしゆじやろうが、もう一杯、いこう」

「さいですか。どうもすみませんねえ」

金博士は、またも盃になみなみ注ついでもらつて、老師と共に乾盃をくりかえした。

こんなことが三回続けられた。そして、老師の持てる盃は、一回毎に重くなり、そして三回目には、穴の入口まで酒が上つてきた。もうこの上は入らない。

やがて朝ちようさん餐さんは終つた。

「仲々いい庭園じやろうが。ちと散歩をしてきたらどうじゃ」

「はい。では老師先生」

金博士は、日頃のつむじまがりもどこへやら、まるで人がちがつたように師の前には従

順となり、庭園へ出た。

「老師は、いらつしやらないので……」

「ああ、わしはちよつとソノ……食事のあとで用を達すことがあるので、そちだけでいっ
てくれ」

「は。では、散歩をして参りましょう」

金博士は、石段づたいに芝地しばちに下り、そして正確なる歩速でもって、向うの方へ歩いて
いった。

「老師、うまくいったようすな」

卓子テーブルの下から、醬があの長いへちまのような額ひたいをぬつと出した。

「叱しッ。ボーイが、こつちを向いている。いやよろしい、窓の方を向いた。……いや、醬
どの、うまくいったよ。あの無類の毒酒どくしゆを、まんまと三杯も乾ほしてしまつたよ。致死ちしりよ
量の十二倍はある。あと十五分で、金博士の死骸しがいが庭園に転がるだろうから、お前の部
下に手配をして、早いところ取片づけるように」

「そうですか。あと十五分ですか。それは大成功だ」

「やれやれ、醬どののためとはいえ、殺せつしやう生せいなことをしてしまつたわい」

王老師は、ちよつと後味あとあじのわるさに不機嫌な表情をつくつた。

醬は、もう話はすんだと、卓子テーブルの下から脱兎だつとのようにとびだすと、部下のつめている部屋へとんでいつて、金博士の死骸の取片づけ方を命令した。やれやれこれで、あの恐るべき金博士を始末することが出来たかと、醬買石は、鼻の横に深い皺しわをつくつて、大満だいまん悦えつであつた。

4

それから二時間ばかり経つた。

食堂の隅の卓子テーブルに、醬と王老師とが向いあい、額をあつめて、何か喋っている。さつきとはちがい、二人の顔付は、共にすこぶるいらいらしているように見えた。

「王老師、ことごとく失敗ですぞ。どうしてくださる」

「どうしてくださるといつて、どうも不思議という外ない」

「余はあのように多額の報酬金ほうしゆうきんを老師に支払ったのも、当館の始末機関に絶対信頼を置いたればこそです。然るに況んやそれ……」

「当館の始末機関は絶対に信頼し得るものじゃったのじゃ、すくなくとも昨日までのところは……。しかしあの金博士に限り効目がなかったので呆れている。察するところ、金博士あの素晴らしい食欲が、一切を阻んでいるのかもしれない」

「食欲なんかに関係があるもんですか。あの毒酒にしても毒蛇にしても、インチキじゃないかな」

「そんなことはない。あの毒酒では、過去において千七百十九名の者が斃れ、毒蛇では百九十三名が斃れ、いずれも百パーセントの成功を見たのじゃ。殊にあの毒蛇に咬まれた者のあのものすごい苦しみ方に至っては……」

「それは余も一度見たことがあります、実に顔を背けずにはいられなかつたです。その毒蛇と今日の毒蛇と、毒性は同じものですかね」

「毒性に至っては、今日のやつは、特別激しいものを選んだのだ。しかも今日のやつは、非常に獐猛どうもうで、人を見たら弾丸のように飛んでいって咬みつくという攻撃精神に燃え立っている攻撃隊員というところを五匹ばかり選り抜いたので、それで相手が斃れないとい

う法はないのじゃ。不思議という外ない」

「ですが、わが部下の話では、その突撃隊の毒蛇が、金博士の腕と足とにきりきりと巻きついたのを双眼鏡でもって確かめたというとるですが、博士は別に痛そうな顔もせず、銅像のように厳然^{げんぜん}と立っていたそうです。本当に突撃隊ですかなあ」

「すぐとんでいってきりきり巻きつくところから見ても、それが突撃隊員だということが分る。その毒蛇が人語^{じんご}を喋^{しゃべ}ることが出来れば、もつと詳しいことが分るのじゃが……」

話の最中に、醬の部下が、庭の方からあわただしく食堂の中にとびこんできた。

「委員長。たいへんです。金博士が、只今これへ現れます」

「え、こつちへ金博士が……」

「あ、あの足音がそうです」

ずしんずしんといやに底ひびきのする足音が聞える。醬は、泡^{あわ}をくっっているうちに、逃げ場を失い、またもや卓子^{テーブル}の下にごそごそと匍^はい込んだ。

卓子のシーツの裾^{すそ}が、まだゆらゆら揺^ゆれている最^{さい}中に、金博士がぬつと入って来た。どうしたわけか、金博士は、頭の上から肩のへんにひどく泥を被^{かぶ}っていた。

「やあ、金どのか。一杯どうじゃ」

王老師も、ちよつとおどろいて、前にあつた盃をとつて差し出した。

「いや、酒はもうたくさんですわい」

と金博士が、落付いた声でいった。

うむと呻つた老師は、のみかけの酒を食道の代りに気管の方へ送つて、はげしく咳き込んだ。

「いや、老師先生。ここの酒は、あまり感心しませんなあ」

「そ、そんなはずは……ごほん、ごほん」

「どうも、感心できませんや、砒素の入っている合成酒はねえ。口あたりはいいが、呑むと胃袋の内壁に銀鏡で出来て、いつまでももたれていけません」

「ま、真逆ね」

「本当ですよ。気持がわるくなつて、庭園を歩いていましたが、ふしぎなことにぶつかりました」

「ふしぎなことつて、それは耳よりな、どうしたのかね」

「この庭園には、冬だというのに、蛇が出てくるんですよ」

「ああ一件の……いや、二メートルの蛇か」

「二メートルもありませんでしたが、頤あごのふくれた猛毒をもった蛇です。トニメレスルス・エレガンスに似ていますが、それよりもすこし長くて九十五センチぐらいありました」

「それはたいへん。君に咬かみつかかなかったか」

「すこしは咬みついたらしいですが、私は感じがにぶいのでねえ。ですが、脚だの腕だのにきりきり巻きついて歩くのに邪魔をしますので、癩しやくにさわって、補えて来ました。ほらこれです」

金博士は、ぬつと右手をさしだした。その手には、例の蛇が四五匹、ぶらりと下ついていた。

「うわッ」

王老師は、おどろいて、椅子に腰かけたまま、うんと呻うなって目をまわした。

「ああ、老師は蛇はお嫌いきらいでしたか。これは失礼。では取り捨てましょう」

と、博士は手にしていた蛇を、卓子テーブルの下へ、そつと捨てた。

すると、卓子の下で、

「きやッ」

と、只ならぬ悲鳴が聞えたと思つたら、卓子が華はなばな々々しく持ち上り、中から一人の真まっさ

青^おな皮膚をもった人間がとびだしたかと思うと、衝^つ立^たをぶつ倒して、料理場へ逃げこんでしまった。それこそ余人^{よじん}ならず醬買石^{しょうかいはし}だったことは、今ここに改めて申すまでもなからう。

5

「王老師。あんな手ぬるいことでは、最早^{もはや}だめですぞ」

醬は、老師に詰めよつている。

老師は眉をあげ、卓子をどすんと打った。

「まあそう焦^あせるな。あの手この手と、まだやることはたくさんある」

「この上、金の奴に一分間でも余計に生きていられては、余^よの面^{めん}目^{もく}にかかわる」

「さわぐな。いよいよ今日は彼を貴賓^{きひん}の間に入れることにしたから、こんどは大丈夫だ」

「ああ貴賓の間ですか。それは素敵だ。見たいですな、中の様子を……」

「見たいなら、見せるよ。こつちへ来なさい、テレビジョン器械をのぞけば、貴賓室の様は、手にとるように分る」

「おお、それはいい」

王老師に案内されて、醬はテレビジョン室に入った。高圧変圧器がうーんと呻り、室内が真暗になると、ブラウン管の丸いお尻が蛍のように光りだして、やがてその上に、貴賓室の内部がありありとうつりだした。

「ほら見ろ。何も知らず、金博士のやつ、今入ってきたわ」

博士は入口の扉をあけて、部屋の中へ入った。そして扉のハンドルを押して、扉をしめた。

とたんに、高声器から、だだだだんと、はげしい機関銃の音が聞え、画面で見ていると、扉と向いあつた壁から濠々と煙が出て来た。要するに、それは扉をしめる拍子に自動式にそこを狙つて前の壁の中に仕掛けてある機関銃が一聯の猛射を行つたものである。これが普通の人間なら、まだ扉のハンドルを外さないうちに、背中から腰部へかけて、蜂の巣のように銃弾の穴があげられること間違いがないのであつたが、金博士には、それが一向筋道どおり搬ばない。博士は、平気な顔で、ちよつと自分の尻をがさがさとかいただけ

であつた。

この光景を見て、醬は怒り、王老師はなげいた。

「王老師、あれは弾丸たまぬきの機関銃を撃つたのですかい」

「おお醬どの。ふしぎという外ほかない。しかしまだあの部屋には、かずかずの始末道具しまつどうぐがあるから、まだ失望しつぼうするのは早い」

室内の金博士は、のつそりと、シャンデリアの下に立つた。すると、矢庭やにわにそのシャンデリアがどつと音をたてて、金博士の頭の上に落ちてきた。金博士の頭蓋骨ずがいこつは粉碎ふんさいせられ、こんどこそ息の根がとまつたろうと思われたが、あにはからんや、粉碎したのはシャンデリアだけであつた。博士は相変らず、銅像のように部屋の真中まんなかに突立つったつて居り、そして、首にかかつたシャンデリアの枠わくを、面倒くさそうに外して床の上に放りだしただけであつた。

「王老師。見ましたか。あれではシャンデリアが饅頭まんじゅうの皮で出来ているとしか思えないですぞ」

「ばかいわつしやい。あの落ちた音で分るが、大した重さのものだ。ほほ、注意、博士が椅子に坐るぞ」

「椅子に坐ることが、何か重大なる意味があるのですか」

「まあ、黙って見ていりや分る」

金博士は、散乱した硝子の^{ガラス}碎片^{さいへん}を平気で踏んで、窓際に置かれてある安楽椅子に腰を下ろそうとして、椅子に手をかけた。

「ほら、腰をかけるぞ」

金博士がその安楽椅子の上に腰を下ろすのが眺められた。とたんに、あーら不思議、博士の身体はぶーんと呻り^{うな}を生じて空間を飛び、大きな音をたてて壁にぶつかつた。

「ほら、あれを見たか。あれが、叩きつける『椅子』じゃ。あれでは硬い壁に叩きつけられて、生身^{なまみ}の人間は一たまりもあるまい。可哀^{かわい}そうに死んだか」

「王老師、壁に穴があきましたよ。人体^{じんたい}の形をした穴です」

「何じゃ」

「そして金の奴の姿が見えませんが。あつ、あの穴から、部屋の中をのぞいています。王老師、金は自分の身体で壁をぶちぬき、無事に廊下にとびだして、部屋の中をじろじろみているのですよ。可哀^{かわい}そうに死んだかも何もあるものですか」

「ぶーん、これは想像に絶して、あの金博士め、手硬い奴じゃ」

この某国大使館の、いろいろある始末機関をそれからそれへと動員して使ってみたが、
どういうわけか、たった一人の博士を片附けることは仲々容易に成功しなかった。

「王老師、どうしてくれる」

「待て、せつかちな！」

今や鬻買石と王老師の間柄は、湯気の出るほど切迫していた。

「もう一つ、やってみる必要がある。これなら、きつとうまくいく」

「どうだかなあ、信用は出来ん」

「いや、これは確実だ。火薬炉の中につきおとして密閉し、電熱のスイッチを入れて、

じゆうじゆう焼いてしまうのだ」

「本当にそのとおりいくのなら、大したものだが……」

「きつとうまくいく。さあ見て居れ。今、金博士が、あの廊下の角を曲ると、とたんに床
が外れて、金の身体は奈落へおちる。その奈落には、火薬炉が大きな口をあけて待ってい
るのだ……」

「能書はあとにして、金博士を骨にして見せて下され」

「いざ、いざ、これを見よや」

王水險老師は、この寒中に汗だくだくとなつて、廊下の床をおとすスイッチを引いた。金博士は、廊下をそのときゆつくり歩いていたが、何の考かんがえもなく、この手に引ひっ懸かかつて、奈落へ……。それから、がちやん、がらがらと大きな音がして、身は火薬炉の中に密閉されてしまった。

電気炉のスイッチは入った。じりじりと電熱線は身ぶるいをはじめ、燻こげくさい熱が久振りに人間の膚はだを慕したつて、匍はいよつてきた。

高熱三時間。これくらい長い間熱すると、人間の肉や皮は燃えおち、人骨じんこつさえ、もう形をとどめず、ばらばらとなつて、一つかみの石灰いしはいとしか見えなくなる。

「もうこの辺でよろしかろう。ほう、ずいぶん手間をとらせたわい」

と、王老師は、醬立たちあ合あいで、火葬炉の蓋ふたをぎりぎりばったんと開けてみた。すると、あら不思議、炉の中からは、依然たる姿の金博士がぬつと現われ、

「わっはっはっ、わっはっはっはっはっ」

と、あたりかまわず無遠慮な笑しょうせい声を響かせながら、そこを出て、階段をとことことのぼっていつてしまったのである。

金博士は、ずんずんと歩いて、元の居間へ戻つて来た。

扉をあけると、部屋はきちんと片づいている。部屋の隅には、博士のトランクが三つ、積み重ねてあるのが見える。

「おお、帰ってきたか」

博士の声がした——部屋の隅に、その声があったようである。

博士は、部屋の真中に、黙って直立している。

すると、三つ積んであるトランクの一番上のものが、ころころと下に転りおちた。すると、二つ重ねてあったトランクから、ぬっと人間の首が出た。それは何と不思議にも金博士そっくりの顔をしていた。

すると、こんどは上にのっているトランクがもちあがった。そのトランクに二本の足が生えた。トランクに足が生えたわけではない、裸の金博士が、真中に穴のあいたトランクを胴にはめたまま立ち上ったのである。裸の博士は、そのトランクを外した。そしてこのこと立ち現れて、部屋の真中に立っている服装正しい博士と対座した。二人の博士。一体これはどういうわけであろうか。

裸の博士は、そこで大きな欠伸あくびを一つしたが、それから両手をさし出して、服装正しい博士の身体にさわってみた。そして呟つぶやいた。

「うむ、よく冷えている。十分熱に耐えたようじゃ。彼奴らは、まさかこの人造人間の胸の中には、液体酸素の冷却装置があるということに気がつかないのじゃろう。いや、ことによると、このごろ彼奴らの前に現れる金博士が、かくの如き人造人間であるということにすら、気がつかないかもしれない」

この独りごとから推すと、裸の博士が本当の金博士で、服装正しき博士こそ、身代りの人造人間の金博士であったのである。道理で、毒酒毒蛇も平気だし、弾丸にあたつても、壁にぶつけられても死なない筈であった。

「ああ、この大使館の燻製の鮭と火酒にも飽きてしまったわい。もうこれくらい滞在しておけば、王老師の顔も立つことじやろう。では今のうちに、道具をまとめて、帰るとしようか」

そういうと、金博士は、無造作に、人造人間の金博士をばらばらに解体し、それを例の三つのトランクに収めた。そしてこんどはきちんとした旅装をととのえ、トランクをかつぐと、葺をふかふかとふかしながら、悠々とこの館をふらふらと出ていってしまったのであった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年11月

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2009年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大使館の始末機関

——金博士シリーズ・7——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>